

特急やくも4号の女

久々に早朝のやくも号に乗った。折から紅葉の季節。窓際の席がよいのだが、あいにく指定席は混んでいて通路側しか空いてなかった。列車が**米子**に着いた時、眼鏡の若い女性が隣の席に座った。会釈を交わした時の印象は、純朴な山陰のお嬢さんといった感じである。

峠を越え**生山**あたりから、隣の彼女がモゾモゾ動き出した。ちらりと横目で窺うと、爪を磨いている。続いて小瓶を取り出しマニキュアが始まった。紅葉に彩られた山々を眺めたいのだが、彼女の横顔を見ることになるので、躊躇する。何とも不自由なことである。

新見に近づいた頃、彼女は更に大胆になった。手鏡を取り出し本格的なメイクが始まった。次から次へと様々な化

粧品の香りが漂う。車窓を見るふりをして横顔を覗くと、眼鏡をはずした彼女のまなこはビックリするほど大きく、まつげが華麗な曲線を描いている。もちろん肌は艶やかに輝いている。

戸惑う私と彼女を乗せて列車は**備中高梁**を過ぎた。私の存在など全く眼中にないらしく、彼女のメイクはいよいよ佳境に入った。そして**倉敷**を過ぎた頃、強い芳香が漂った。髪に何かを塗り付けている。最後の仕上げのようである。

岡山に着いた。席を立って正面から見たお嬢さんは、まさに別人であった。彼女はこれから何処で誰と逢うのだろうか？相手の人は彼女の二時間にわたる渾身の作業と私の困惑を知ることはない。化粧とは「ばけてよえお」と書く。あな恐ろしや。